

敗戦の記録（昭和二十年三月以降）

石川県 古池 四郎

昭和二十（一九四五）年

独立重砲兵第五大隊 大隊長齊藤竹雄中佐、中隊長

松本桂一少佐

三月九日

松本中隊長より延吉（エンキキチ 閔島）に新設される歩兵第二八一連隊要員として転属を命ぜられる。

三月十日

朝、阿城駅を出発、新京（長春）の姉（安田良枝）を訪ね、夕方延吉の二八一連隊本部に至り、連隊長高畑洋平大佐（陸士四一期 ノモンハン事変時小松原兵団長中将の副官）に着任申告をする。

副官寺田咲太郎中尉より連隊人事係を伝達される。連隊の配置は、阿城の部隊と全く同じ。赤煉瓦（れんが）二階建、兵舎前方は二万坪位の練兵場、更に前方は官舎、

市街地、延吉駅、西方は小高い丘、東方は二八二連隊に続く小高い丘。

三月三十一日

軍旗拝受のため連隊長、旗手二村茂少尉、護衛算求少尉他下士官二人、計五人、朝鮮經由東京へ向かうことになった。

（以下、二村少尉の手記による）

釜山（プサン）からは、軍旗拝受に上京する他の四個連隊と一緒になり連絡船に乗ったが、敵潜水艦が出没。下関あるいは門司に上陸せず博多に上陸した。

懐かしの内地への第一歩を踏みしめて驚いた。既に空襲に遭ってまともな家は見当たらない、内地がこんなに傷め付けられているとは夢にも思っていなかった。東京行の時間を駅で聞いてみると、何時に発つか分からないと言い、明朝には発つ予定ということ。

四月二日

翌朝、我々は特別な任務のための上京なので優先に乗車させてもらったが、その後は大変、汽車はすぐ満員になってしまった。

九州を北上して一路東京へ向かった。特急などはないから、行く程に走る程に乗客は増えるばかり、遂に窓から乗り込んで来る始末となつて便所へも行けない。

広島島の辺りを東進している時、大阪方面の空襲だと言うので列車は立ち往生して、大阪の手前で夜となつた。

四月三日

通過する大阪の大きな街は、焼けた跡で見る影もない。それでも列車は空襲を受けなかつた。

四月四日

午後、東京に着いた。東京は全くの焼け野原であつた。所々に鉄筋の洋館がその骸だけを残して建っている。あととは見渡す限りの瓦礫野原であつた。満州はこれを見ると天国のようである。宿舎の借行社へ着いた。

各連隊長は陸軍省や参謀本部へ連絡した。我が将校、下士官は靖国神社、明治神宮に参拝した。

軍旗の拝受式は、四月五日十時に決まつた。いよいよ

よ明日参内するという前夜、空襲を受けた。初めての空襲体験であつたが、直撃は受けず。

四月五日

軍旗拝受の日

小磯内閣総辭職の日。ソ連は日ソ中立条約不延長通告。小磯大将には宮内省の廊下で会つた。

私は心を清め、部隊長に同行して坂下門より宮中に参内した。当時宮中の正殿はあつたが、米軍の爆撃を憂慮して宮内省拜謁の間で親授式が行われた。拜謁の間は余り広くない四間に五間位で、上に机が一つで物一つない。極めて質素な部屋であつた。正面には学校の教壇のようなものの上に机が一つあり、そこに天皇陛下が直立しておられ、左右には陸軍大臣、梨本宮、侍従武官はじめ将官がずらりと待立されていた。

まず連隊長と二人、部屋の入りの廊下に向かつて敬礼し、一步部屋に入り最敬礼をなし、進んで玉座の三步前の所でもう一回最敬礼をし、咫尺の間に龍顔を拝した。「武人の誉れ、これに過ぐるものはなく」の感慨を得た。このあと陛下より勅語を賜つた。

勅語「歩兵第二八一連隊のための軍旗一旒を授く。
汝軍人等戮力協心我が帝国を保護せよ」

続いて軍旗親授が行われ、連隊長は三步前進して待機し、陸軍大臣が軍旗を陛下に渡され、受け取られた陛下は御自ら連隊長に手渡された。連隊長はうやうやしく拝受し、三步下がって旗手と向かい合い手渡された。私はこれを捧持して連隊長と共に陛下に正面し、連隊長は陛下に最敬礼をなし、旗手は直立不動の姿勢のまま軍旗を垂れた。なお、軍旗は陛下のみ拝礼し、他には絶対に拝礼の姿勢をとらない。

次に部屋屋の入口まで後退して最敬礼をなし、部屋屋を出て敬礼をし控えの間にながった。ここで連隊長は奉答文を謹書した。

奉答文「謹んで令勅を奉ず。臣等死力を尽くし誓つて我が帝国を保護せん」

次いで宮中正殿正面玄関へ軍旗を捧持して、算少尉及び護衛下士官の敬礼を受け、正殿控えの葡萄の間に置いて軍旗を黒編子の袋に入れ奉納箱に納めた。

この後、茶菓及び煙草を賜り小憩のあと、正面車寄

せより陸軍省差し回しの自動車に軍旗と連隊長、私と算少尉と同乗したが道中は一切交通止め、警官警護のうち二重橋を経て参謀本部に到着。

敵空襲に備えて軍旗は地下壕に安置し、一同は同本部に泊した。

四月六日

朝、陸軍省差し回しの自動車で昨日と同じく東京駅に至り、貴賓室にて列車の発車時間を持った。時間と共に駅長の先導により軍旗のために用意された特別列車に軍旗四旒と将校、下士官が乗車した。なお、東京在留中夜間一回空襲を受けたが、被害は受けなかった。

一路満州へ向かい、門司より釜山を経て三日後に延吉に集合（四個連隊）。

四月九日

原隊の二八一連隊へ帰った時は、真実ホツとした。軍旗は連隊長室の奉安所に奉安した。

（二村少尉の手記終わり）

四月下旬

連隊長以下二千二百五十人中二千五十人は、対ソ戦に備えて鮮満国境、長白山脈北部寄り延吉の二八一連隊より約四〇キロの上三峯山地の陣地に向かって行軍に入った。二百人ばかりは軍旗と共に連隊に留守部隊として残った（陣地には軍旗の奉安所がまだできてなかった）。この軍旗を八月十六日延吉の兵舎で奉焼するとは夢にも思っていなかった。途中、龍井村付近で阿城重砲の一・二・四部隊が展開しているのに出会った。

上三峯頂上よりは北朝鮮の要港羅津が遠望された。秀吉時代、加藤清正の虎退治で知られた会寧の町が眼下に。兵舎は幕舎、入浴はドラム缶の生活が始まった。

小学校二年生の時から兄の指導で乗馬に慣れていた。上三峯から延吉間を何回か乗馬で用件を果たすことができた。急用の時は何が役に立つか分からな

い。

五月上旬
戦況は次第に悪く、硫黄島の玉砕に次いで我が国最

大の戦艦大和ほか数隻が、九州の南西で米艦載機の猛爆を受け全滅したとの噂が流れた。

五月中旬

陣地に軍旗の奉安所ができたので、延吉の留守部隊より軍旗を迎えた。

程なく三軍司令部命令で、延吉の下士官候補者教育の教官として二村少尉が外向することになる。連隊長よりその補充として私が連隊旗手を命ぜられる。

八月七日

広島へ米軍が特殊爆弾を投下した噂を聞く。

八月八日

ソ連、対日宣戦布告をしたと聞く。連隊長は、全員に蛸壺ツクシを掘るよう布告する。悪い予感で胸騒ぎがする。

八月十日

ソ連の偵察機が飛来する。牡丹江方面に爆撃があったようだと言われる。山の中なので情報不足、どうなっているか分からない。死を覚悟せねばならないと思う。淋しいことだが皆同じことだと思ふ。山林と山ば

かり、虚無感が頭ばかりか五体を駆けめぐっている。

八月十五日

通信の笈少尉より終戦の玉音放送があつたことを知らされる。

八月十六日

早朝、連隊長より急遽原隊に帰隊準備を命ぜられる。師団及び軍司令部と諸事確認のためと思われる。情報不足と初めて知る敗戦のかつて味わつたことのない状況の中で何をしてよいか分らない。若い連中の中に白頭山の金日成の所へ行こうかと言う者もいた。連隊長の指示を待った。五両の車両で連隊長、軍旗、大隊長、副官、小生以下本部要員、歩兵一個中隊、MG一個中隊、山砲一門で出発した。第二大隊長片山少佐以下は陣地に残った。

正午頃部隊着、師団司令部の指示を待った。二村少尉と合流。師団命令により連隊はその位置に留まり、軍旗及び連隊本部入口二階に掲げてある菊の御紋章並びに秘密書類の始末を指示された。このため、延吉の部隊にいる将兵全員を集め軍旗の決別式を行った。

決別式が終わって営内にある神社の前で穴を掘り、竿頭の菊の御紋章を除きガソリンをかけて奉焼し、埋めて砂盛りをした。

ああ思えば僅か四カ月前、宮中で陛下から授かつた二千四百人の将兵のための軍旗は、一剣一弾の下を掻い潜ることもなく奉焼しなければならなくなった無念さは、我一人でなく子に孫にまで引き継がれるもの、せめて一房でも残したいと連隊長に申し出た。

連隊長は、私も連隊旗の一房でも残したいと思うが、無念さを心の奥深く留めることで納得してくれ、軍旗はソ連に渡すわけにはいかない。神社前に掘った穴に埋めた。竿頭の菊の御紋章、部隊の御紋章は鍛工場で処置した。

四カ月前、陛下より親授された情景を思い出されて、連隊長、陸士四一期生高畑洋平大佐の心中は無念で涙が光っているのが見えた。

軍旗を奉持したのは、連隊長、二村少尉のほか二、三人だけだつたと思われた。連隊長は、上三峯陣地に片山少佐以下の主力を残して来たので、奉焼後、陣地

の整理をするため上三峯陣地に帰ることになった。I
大隊長小川大尉の姿が見えない。二村少尉に連隊長が
帰るまで留守中の指揮を命じて万全を期した。

同行した砲兵少佐はいたが予備で年輩だったので、
二村少尉は真に頼りになるのは先般少尉になった本部
の私だけだから、二人で一緒に頑張つて切り抜いてい
くことを申し合わせた。

三軍司令部命令で将校の帯剣を除く全部の兵器、弾
薬を一カ所に集める指示が来た。将校の拳銃を取り上
げるのに手間取つたが、漸く衛兵所に集め、ソ連軍立
会いの下にソ連に引き渡した。武装解除である。

夕方が迫つて来た。五時頃ソ連軍の重戦車三台が營
門の前に停まつた。日本の戦車より大きい。軍旗の提
出を迫つた。奉焼してない。衛兵所には銃はない。衛
兵は丸腰なので木銃を携行した。神経が擦り減る思い
の一日であつた。

八月十七日

早朝、国境方面春化、琿春五家子の歩兵連隊長等
が、十五日早朝ソ連軍が営庭へ砲弾を打ち込んで攻撃

をかけてきて混乱が始まったことを声高く怒鳴りなが
ら衛兵所に次々入つて来た。これを分散して配置し
た。

延吉が騒然としてきた。関東神社が燃え上がった。
鮮満人が酒保を襲つた。某軍曹が官舎が危険となつて
きたから私を応援にやらせてくれと申し出てきた。銃
がないので木銃の先を尖らせて三十人の兵隊をつけて
官舎へ向かわせた。軍曹の計らいで全員を兵舎に引き
揚げさせた。家財は捨てざるを得なかつたが一応ホッ
とした。

ソ連将校が兵隊を数人連れて来たが言葉がなかなか
通じない。炊事場より酒肴を持ってきて飲ませて何と
か帰した。後でロシア語通訳講習を受けていた曹長が
いるのが分かつた。

延吉及び近郊の居留民、開拓団の人たちや軍属の人
たちが兵舎へ助けを求めて入つて来るのが次第に多く
なつて配置に追われるようになった。開拓団の婦女
子、国境方面の人たちは着の身着のまま、婦人は男
装の人や顔に墨を塗つた人がかなり見受けられた。何

ともかわいそうなことだ。兵舎の割当てに迫られた。国境軍春方面からの引揚者の列車がソ連の飛行機の機銃掃射を受けて、引揚者は命がけだったと話していた。

程近い所に新設の二八二連隊があるが木造兵舎であつたので、当方へ軍人以外の人が多く集まつた。東寧、下城子方面の部隊の兵隊も次第に多くなり、右方の丘には見慣れない旗が何本も立つた。朝鮮独立の旗だとか。

八月十八日

朝、I大隊長小川大尉が帰つて来た。帯剣、階級章、靴もない惨めな姿で、顔も青く息もハアハアさせながら帰つて来た。

彼は十六日陣地より帰つた後、連隊長に無断で官舎へ行つたようだ。そこで満鮮人に囲まれてゴタゴタを起こし、留置され相当ひどい目に遭つて二晩も帰られなかつたようだ。相当虐待を受けたようで留守隊長をやれる状態ではなかつた。二村少尉は大隊副官太田少尉を呼んで休養させるように預けた。

残留の大谷准尉には連隊長の命令を伝えた。救助を求めて兵舎に集まる人が次第に多く、日本人が一応安全を保たれる場所のこの兵舎は二千五百人を超したようだ。

ここ数日のことを振り返つて、連隊長がノモンハンの経験があつた故か、適切な判断で処置を進められたと思う。

十五日、玉音放送のあつたことを知つて、急遽軍旗と一部の隊と共に陣地を下り司令部へ状況の確認をと、軍旗、御紋章の処置をして山の陣地へ戻り、機密書類の処理をして残留の片山少佐と全員をまとめて帰つて来た。更に事後処理を確認し、在満召集者には即刻召集解除をなし、各自途中までは集団行動を取るように指示し、一日一時も早く妻子のいる家へ帰るよう指示した。

隣の二八二連隊は陣地で軍旗を奉焼しその場で連隊の解散を命じたため、兵隊は三々五々原隊へたどり着くも残留部隊は機能せず、我が部隊へ聞きに来る者も多く困つていた。

八月十九日

この収容所全員の移動がソ連より出て、全員が営庭へ出た。半日位立たされたが元へ戻ることになった。混乱し大変心配させられた。収容人員は三千人位になっている。ソ連兵が数人でマンドリン銃を肩からかけてやって来るようになった。

彼らの目当ては万年筆と腕時計である。「ダバイ、ダバイ」と言つて半強制のように要求する。一人で二、三個腕にはめている者もある。大柄な大男は見当たらぬ。独ソ戦を勝ち抜いて来たような精悍な若者も見えない。スラブ人でない東洋系の連中か蒙古系でないかとも思われる。服装は作業服かで、年老いた感じの者はいない。

この兵舎（収容所）は三軍司令部より数キロの所にあつて、系統立つて運営されていたのでまだまだな方だつたと思う。夜になるとソ連兵による婦女暴行があると聞く。ピストルの銃声を聞く。夜の治安の統制はソ連に任されている。

幼児の死亡（乳離れした年頃）が増える。栄養不足

と、整つた診療施設がないのが大きな原因だがどうにもならない。火葬はできず、穴を掘つて遺品とともに営庭に埋め卒塔婆を建てて、読経はままならない。

八月二十日

夜になると満鮮人が掘り返して遺品を持って行くのもあるようだ。親とすれば耐えられない悲しみであることも分かる。また、夜にソ連兵に婦人が犯され、旦那とともに自殺した人が出た話を聞く。

八月十七、十八日、居留民や開拓団団員が数年またはそれ以上前から精根を尽くして成就した成果が、今朝にしてソ連の横暴な侵入のため消滅した無念さは、何に例えたらよいか、地獄としか言いようがない。幼児の死亡は日を追つて増え、一日十人以上の日がある。広い営庭は日ごとに卒塔婆の数が増すのが分かる。

営内見回り中に将校集合所の建物の中でゴトゴト音がするので入つて風呂場の扉を開けたら、ソ連兵三人がピストルを突きつけて来た。急に扉を開けたのでソ連兵もびっくりしたのだらう。私もびっくりした。水

筒らしい物を持っているので水を汲みに来たのではと咄嗟に思つて「ウォーター」と言つたら「ワーカー」と言葉が返つた。そこで「カム・ヒヤー」と言つて水道栓を教えた。ピストルを小脇に挟んで栓を回して水を出した。ホツとして「ヤー」と言つて手を振り扉の外へ出た。

こっちは無手、三人に囲まれパーンと一発撃たれたら終わりだったかもしれない。何回か事故死につながる場面に遭遇したことを思い出して真にホツとした。

(二村少尉と混乱している収容所の処理ができたのは、私も若かつたのと元気だったので今でもよくやれたと思う)

八月下旬

凶們へ通じる鉄道で汽車が走るのが見える。延吉
— 凶們— 綏芬河— ソ領へ。

新京、吉林方面より積載物資が満積の状態で運ばれて来るようになった。初めのうちは重機械が多く、来る日も来る日も満州国建設のため日本の投下した莫大な数量の重機械類(発電所、鉱山、鉄工所、化学工場

等)がソ連へ運ばれて行く。多分、北朝鮮、関東州、南満州にあるものを解体してソ連へ運んでいるのであろう。

一カ月以上続き、次第に小物へ、机、椅子まで積んで行くように思える。わずか数日の参戦で泥棒、公然とした国家としての泥棒だ。日本人として子々孫々に語り継がねばならん。

九月中旬

軍関係と民間関係と隔離する命令がソ連より出た。三キロ位離れたドイツ教会へ軍人以外の人が移動することになった。ソ連命令で三百人単位の作業大隊を編成、東満、北朝鮮、樺太から准尉以上の将校が集められて、大隊に三人位付けられてシベリア方面へ移動する伝達が来た。

近衛文隆中尉(阿城重砲兵時代の先輩)のこと

身長は一八〇センチもあり、温厚な顔立ちで健康な体格、アメリカのプリンストン大学卒業後、近衛首相の秘書をしていたが、東久邇宮盛厚殿下が阿城重砲の

中隊長だった故か阿城重砲隊へ入隊した。

その後東滿の国境近くの下城子重砲兵連隊に所屬していたが、敗戦により当收容所に来ていた。私が営内を見回り中、友人（高橋氏）と歩いているところに出会った。

その後十月初め、突然ソ連将校がジープで来て、身回り品を持って近衛氏一人だけがジープで連行された。四囲にいた連中は余りにも急なことだったので茫然としていた。

終戦時から將兵に対する国際法上の取扱いを説明し「日本人は捕虜を恥とと思っているが、決してそうではない」との確固たる信念を持っていた中尉は、隣りにでも行くように皆に会釈して出て行った。（高橋氏の手記）

十月上旬、ジープで連行されてからハルピンのノヴォニコリスク將官收容所へ。

二十一年四月モスクワに移動、二十七年まで市内のプトイルカ、ルビヤンカ、レホルトの各監房を転々と收容、二十七年一月、国家保安省特別会議によりソ連

の要求に従わないので刑法五八条四項（國際ブルジョワジーに対する援助）に該当する者として禁固二十五年を言い渡されている。そして捕虜の待遇から囚人扱いを受け、囚人列車に乗せられ同年三月シベリアのアレクサンドロフスク監獄に収監、二十八年八月獄中から再審請求を出し、十二月ソ連少佐から取調べを受けている。「帰国の際は、ソ連についてどのようなことを言うのか」など訊問されている。

三十年十二月二十一日イルクーツク市保安部の監獄に移監、更にノヴォシビルスク、フェルトロフスク、キーロフ、ゴーリキ、ウラジミール各中繼監獄を経て、翌三十一年六月十五日モスクワの北方イワノヴォ四八收容所に移監された。

それまで風邪を引く程度で健康を保っていたようだが、十月二十三日気分が悪いと臥床、翌日急性腎臓炎と診断され病室に入り治療を受けたが、高熱、不眠が続き脳出血を起こし、手足の痺れを訴え間もなく意識不明となり急逝した。時に昭和三十一年十月二十九日午前五時、享年四十一歳、イワノヴォ第四八收容所で

あった。(下城子連隊高橋良寿中尉の手記)

近衛正子夫人(浄土真宗西本願寺派門主の実妹、現在日本赤十字副会長)の手記より

文隆と私が下城子の官舎で一緒に暮らしたのは、昭和十九年十月から翌年五月頃まで半年余りのことであつた。

その後部隊は鮮満州国境の凶們に移動してゆき、私たち家族も後を追って七月に凶們へ行くことを許されましたが、一カ月ほどで再び下城子に戻れという命令で官舎に戻り、まだ荷物も解かないうちにソ連の進攻、そして終戦を迎えたのでした。

主人はその後、捕虜としてソ連に入り、ノヴォニコリスクなどの収容所を経て二十一年の春頃にはモスクワに連行されたようです。そして約七年間モスクワの未決監獄にいた後、形ばかりの裁判によって二十五年の禁固刑を言い渡され、シベリアの監獄に送られました。おそらくこの頃が精神的にも身体的にも絶望のどん底であつたのではないかと想像されます。やがて赤

十字条約による捕虜通信が許され、最初の葉書が家族の元に届いたのは昭和二十七年の年末でした。

それまで生死不明で、殺されたという噂があつたり、私どもにとっては不安と希望の間で揺れ動く日々でしたので、生きていたということは大変な朗報でした。ただその葉書の最初に「幸か不幸か、まだ生きています」と書かれた文字を見たとき、その言葉の裏にこめられた苦勞を思つて涙が止まりませんでした。その後間もなく家族から小包を送ることも許され、約四年間文通が続いたあと、最後に移されたイワノヴォ収容所で、帰国を目前にした昭和三十一年十月末、故國の土を踏むことなく亡くなりました。

主人と共に生活したのは短い間でしたが、生來の明るい性格と温かな思いやりで、世の中にこんな楽しい人がいたのかとびっくりしました。それと同時に、物心つく頃から軍国主義の時代に育った私にとって、主人の自由な考え方、戦争が終わった後のことまで考えている視野の広さに驚くとともに、それまで知らなかった世界に目を開かせられた思いでした。

主人の死については、その時期が日ソ交渉が調印され日本人抑留者は全員帰国させると決まった直後であったため、殺されたのではないかと疑う人も多いのですが、私にとっては、この地球上で文隆を含め戦争のために生命を失った何百万という人たちの死をどう受けとめることが大切だと思っています。幸いにして命永らえた私たちが現在どう生きていくかによって、あの方たちの死が平和のための尊い礎石にもなれば、単なる不幸にもならないのではないでしょう。地球上のほとんどすべての人々が平和を願い求めているにもかかわらず、現実には世界のあちこちで戦争に等しい事態がいつも起こっていることを思うと、人間が持っている本質的な権力指向と残酷さ、そして大勢に流される個人の弱さに絶望的な気持ちになります。それでも平和を願う気持ちと努力だけは忘れず、亡き夫の誇りを大切に胸にとどめておきたいと思っています。

(現、西本願寺社会部会長)

九月頃

ドイツ教会へ軍人以外の婦女子が別れて行つてから、シベリア行きに編成された大隊が出発するようになって収容所の様子も少し変わって来た。丘に立っていた朝鮮独立旗が増えている。

九月二十五日

起代子(二女)のお七夜が明けた。この名前は連隊長が命名して下さったもの(次の世代を起こす意)。長女の腫は手術の後が良くなったといえ漸く歩ける程度、長男茂樹は栄養失調で全然歩けない。そして生まれたばかりの起代子は首も座らない。こんな三児を連れて一体妻の正枝はどうして移動できるだろうか。胸の痛む心配事だが、どうしようもない。三軍司令部にいた時、参謀本部でタイピストをしていた重松尚子さんがうちの師団へ転出して来てこの収容所にいたことで、この人に正枝がお産した時、子供のお守りして頂いたことがあった。体格もよく気の優しい人であったので、再び彼女に添い方を頼んだ。

移動には家財道具は持っていけない。当座の必需品

だけで、どうしても要るものはオムツである。正枝の着物は全部オムツにして、ほかにズタ袋を作り、子供用のガラクタを入れ重松さんに持ってもらった。

正枝は茂樹を背負い、起代子は抱いて、私は腫を抱き上げてトラックに乗せた。その途端に出発しあつたという間に行ってしまった。

自分一人の身でも十分でないのに幼児三人を連れて生活をどうするのか、ただ心配である。この時程、敗戦の惨めさを感じたことがない。

母性愛と気力とそれに重松さんの手助けを受けて、しっかりとやってくれる正枝を信ずるよりない。

十月

ドイツ教会に入居者のため薪割りに応援に行くことが許され、四、五日に一度十人くらいで行った。

私が当番に当たったり、家族と別れて半月目である。不安と期待で行ってみると「腫はジフテリアの疑いで隔離されている」と正枝が言った。早速病院へ行ってみると五、六人の子供が倉庫のような所にいる。腫は疲れ切って、それでも一人ちよこんと座っていた。その

不憫な姿を見て泣けて泣けて仕方がなかった。しかし涙を見せてはいけなないと顔だけは笑顔を作って、暫くの間そばにいてあげた。しかし、任務がありいつまでもいられない、辛いことだった。それに茂樹と起代子のこと心配だ。

「腫、今お母さんがお薬を持って来るから、おとなしく待っているんだぞ。お父さんは坊やと赤ちゃんを見て来るからね」と言うと、ただ頷くだけだった。そばにいてあげたいと思うのにいてあげられない空しさよ、抱いてあげたいのに抱いてやれない辛さ、何度も何度も顔を見て、後ろ髪を引かれながら部屋を出た。

妻子は二階にいた。子供を見て驚いた。茂樹は骨と皮ばかりで、目には目脂がいっぱいである。

「父ちゃんの所へ来い」「イヤだっ」子供の声はか細かった。そして父の顔さえ記憶にないらしい。死臭さえするようだった。

「これは駄目なようだ、覚悟しておけ」と正枝に言った。この言葉を言うのは酷なことだと思ったが、子供の死によって倒れたりすれば今以上に惨めな思い

をしなければならぬ。止むを得なかった。案の定、傍らにいる人が「そんなむごいことを言いなさんな、奥さんは一生懸命なんですよ」私は、そんなことが分からんはずがない、百も承知だった。しかしこの場合、私の気持ちも普通ではない、茂樹との対面もこれが最後という気持ちがあった。幾ら可愛くても阿弥陀様の所へ召されるならあの世へ送る覚悟が必要だった。

「生きていて欲しい」と願いつつ「坊やはまだ目だが、気を落とさんようにな」、たったそれだけ言うのが精いっぱい、胸の苦しさを押さえつつ別れた。

十月二十四日

再びドイツ教会へ行くことができた。その間、何の連絡も取れず安否が気づかわれた。

茂樹が私を呼んだのだろう、私が収容所へ着いたら「坊やは昨夜亡くなりましたわ」、坊やの骸は妻の手から離れて門衛の建物の中に置いてあるという。

行ってみると、茂樹はせめてもの母親の思いやりであろう、小さな毛布に包まれてそっと置いてあった。

否、坊やだけではなかった。他にも七人の子供の遺体があって、これから埋葬するところであった。私の跡取りとして私の一字を取って付けた名前茂樹。私の全期待を託した坊やの死を耳にした時は、スーッと暗闇の中に引き込まれるような気がした。自分で覚悟をし妻にも覚悟をさせていたものの、現実になってみると気持ちが揺らぐばかりかこんな現況を悲しむばかりだ。茂樹の体を抱きしめた。ずっと抱きしめ続けたのだが埋葬のために遺体は引き取られるのだ、思わず浮かんだ正信偈を唱えた。

しかし、嗚咽のため途切れてしまう。最期の別れがこんなことではと思ってみてもどうしようもない。埋葬には同行は許されなかった。断腸の思いで遺体を渡し、重松さんに埋葬を頼んだ。腫は体調が回復して母と一緒にいたので安心した。起代子は相変わらず発育不全であった。正枝はその子供のミルクを得るために時計を売ってしまう等、苦勞に苦勞を重ねていることがよく分かる。

これが満州における家族との最期の別れになった。

しかも起代子とは永遠の別れになった。

十一月

その間にもソ連の命令で作業大隊（三百人単位）が編成された。各隊に大尉、中尉、少尉が三、四人付けられ、次から次へとシベリアへ連行された。

十一月に入って収容所に残っていた将校に移動が届き、防寒具の支給が始まった。いよいよ内地への帰還のデマが流れた。大連経由か朝鮮経由かとデマが飛ぶ。ソ連の将校、下士官、兵隊、通訳に聞いても一樣に君たちは「トーキョーダモイ」との返事ばかり、それ以上に詳しい言葉が聞かれない。

どこを通過してトーキョーダモイなのか、誰に聞いても聞かえてこない。帰りたいばかりでシベリア行き等とは考えなかつた。先発の三百人位の単位で多くの作業大隊がどこへ向かつて行ったのかも、よく考えてみれば、防寒具が先般支給されたこともあり、ソ連人の言う東京ダモイはここから直接東京へ帰ることではないと考えるべきなのに、誰もそんな考えをしなかつた。

十一月三日

朝、見習士官以上の将校全員が延吉駅より乗車を命ぜられた。大佐には一人の兵隊が付き添うことになり、連隊長に山中上等兵、真面目で元氣な青年が付いた。トラックに乗り延吉駅へ向かう。各自持てるだけの身回り品を雑囊、トランク、中には車を付けたトランクで引いている人もいた。

日露戦争の旅順要塞陥落時、乃木大将がステッセル將軍以下の将校にサーベル着帯を明治天皇の命で許したことがあったので軍刀は引き上げなかつた。軍刀をつけたまま乗車した。

途中の路上で婦人のグループが、どこへ行くのかと心配顔で手を振っていたのが印象に残った。駅の近くの空き地にソ連の婦人（白系ロシア人）が二十人位、どこへ連行されて行くのか僅かの荷物しか見当たらないが、皆大変沈んだ顔をしている。この人たちも悲しい運命にもてあそばされている。

十五両位に千二百人位が乗車した。給食だけでは物足りない、各自が何がしかの物を持ち込んで、汽車は

昼頃西へ向かって発車した。

吉林を過ぎた、小学生位の男の子が小さい荷物を持って線路に沿って歩いている。どこへ行くんだろうか、開拓団の子か一般人の子か一人で歩いて行く。無事に目的の所へ着いてくれることを念じて行き過ぎた。

十一月四日

新京へ着いた。日がまだ高い。ソ連の鉄道員が我が物顔に配車の指図をしている。日本人の鉄道員が見当たらない。避難民の群れが二カ所に見えるが近寄って話ができない。露営しているようで本当に気の毒だ。一昼夜いたが脱走者は一人も出なかった。トウキョウダモイリすぐ東京へ帰ると思ひ込んでいたので避難民に合流する者が出なかった。昼過ぎた頃、発車命令が出た。北へ向かって動き出した。大連經由でなくウラジオ經由だろうか、デマが飛び交う。ハルピンを過ぎ、北満の平原をひた走りハイラルへ着く。ノモンハン事変で苦難をなめたノモンハンは西方二〇〇キロ位の所である。更に汽車は北へ、満州とソ連との国境満

州里に着く。

ハルピン以西の地には初めてである。広漠な草原の淋しい感じの所、ここでシベリア鉄道に乗り換える。満鉄より広軌のようだ。貨車は三段収容になっている。上段は天井が低いので臥せるだけ、中央は外へ出る通路とガラクタストープ、便所用のポーチカ（タル）がある。一覺に二人位なので用便に出ると元の位置へとなかなか入れない。高いところに小窓が二つある。家畜輸送車のようだ。一車両百人、百二十人位入っているようだ、一〇兩位ついている。

北西へ向かって汽車は動き出した。これからはソ連領内である。何だか無人に近い原野で、満州より広いような気もする。夕方貨車が停まった。かなり大きな町のようなだ。チタダと思う。ここから東へ向かえばウラジオだ、東京ダモイだと思った。

しかしなかなか動かない。それからだいぶして動き出したが西へ向かっている。ああソ連に騙された、トウキョウダモイの希望が完全に断られた。ガツカリして気が抜けた。脱走不能だ。

十一月五日

炊事車は前の方、一日に二回の食事、各車両から当番が出てボーチカで受け取りに行く。雑炊で、ロシア語でカーシャと言っている。雑穀を魚肉、羊肉等を炊き込んでゆるいおかゆにしたもの、一人一食分は飯盒の蓋に一杯弱、生命を保つ最低の限度。

「武士は食わねど高楊枝」とは現況では通用しない。チタで増結があった。

十一月六日

シベリア鉄道に入ってから大きな木の生えている林に出会ったことがない。一〇メートルか一五メートル位のものが続いている。林の原野のように思える。沿線にはアメリカの食糧缶詰の大きな空き缶がずっと捨ててある。食糧援助を続けていたことが分かる。アメリカの余裕が現実知らされた。

小さい駅に停車した時、住民が近づいて何でもかっぱらおうとするので日本刀で追っ払ったこともあった。

便所代わりのボーチカが臭いので、軍刀をまだ持つ

ていたから皆と計って車両の床を三〇センチ四方に切り抜いて、そこから用をした。ソ連に発見されたらただ事では済まんという意見もあったが切り開いたのだ。上にボーチカを置いた、幸いにもラーダ収容所に下車するまで見つからなかった。

十一月七日

更に西へ走って行く、海のような湖が見えてくる。水平線が見えない、バイカル湖でないだろうか、世界一の淡水湖か、感慨深い。

イルクーツクの駅に入る。広い操車場の向こうは街だろうか、よく分らないが大きな建物が見える。ロシア本国よりシベリアへ向かう囚人列車に出会った。車両に鉄条網が巻いてある。照明燈が扉の方を向いている。見張り台も見られた。我らにはこんな嚴重な車両を見たことはない。政治犯が主力だろうか。貨車は林の中を更に西進する。国が広い、クラスノヤルスク、オムスク、山らしい山や大森林に会わない。こんな給食では作業をする時が来たら体が動かない。

オムスクから幾日走っただろうか、また囚人列車に

出会った。シベリアへ行くのだろう。そういえば今までトンネルを通った記憶がない。日本と大変地形が異なると思う。

漸く山らしい丘に差しかかった、大きな駅に停まった。チェリヤビンスクは独ソ戦時は、大軍需工業地であったと聞いたことがある。幾つもある大きな建物が見える。その他はエカリテンブルグで、チェリヤビンスクより一五〇キロ北方にあるようだ。中学生時代、ロシアのニコライ二世一家六人十人が、レーニンのボルシェビキ党にウラル山脈中で銃殺処刑されたことを教師から聞いたのを思い出される。

ニコライ二世の頭に、明治二十四（一八九一）年大津訪問中、津田三蔵巡査に切りつけられた刀傷が残っていた。明治天皇は大変に心配されて急ぎ、御見舞いに行かれたので大事に至らず終わり、明治天皇に好意を持たれたと聞いていた。

ロシア革命でモスクワから二千キロ近くも東のエカリテンブルグまで来ていたのか、ニコライ二世一行は中国の東北ハルビンか日本へ向かっていたように思え

る。また大和民族とスラブ民族の違いを感じる。日本人なら全員処刑することはできない。

十一月中頃

ウラル山脈、なだらかな山脈が続く。険しい山や大森林には出会わない。三、四日で草原へ出た。時期は十一月になっているのに農耕の状態を一度も見たことがなかった。まれにコンバイン等の大型農機が畠に残されていた。

十一月下頃

更に西進が続ぎ、ウーファ、サマーラへ出ると大きな川を渡ったのであとで分かったが、ボルガの船唄で知られているボルガ川だった。大平原ソ連の大穀倉地帯に思われるが、農耕する人も農作物も時期外れのためか見当たらない。ソ連の大穀倉ウクライナと程近いように思えるが、地図もないのでよく分からない。

また林の中を貨車が走る、積雪は少ない。寒いけれどたまらない程でもない。ベンザを過ぎた林の中を西へ走る、林が途切れた。貨車が停止した、下車命令が出た。延吉を出発してから一カ月目。

十二月三日

午後だった、下車してまたどこかへ行くかもしれない。間もなく近くの住民が集まってきた。我が車両には来なかったが、各車両に来て時計や万年筆を強要したと聞く。

便所用に床板を軍刀で切り開いた穴が発見されずですんだ。二キロ程歩いてバラック様の建物に入る。二段収容になっている。床板はなく枝を床板代わりに敷いてある。防寒具を着て毛布一枚を敷くだけでは枝が不揃いで背中が痛くて閉口した。すし詰め、便所へ出たら元へ戻るのが一苦勞。ここで軍刀を一同が出した。由緒ある古刀もあったと思う、誠に残念なことだ。武装解除となった。

十二月四日

近くの部落へ行ってみた。大人らしい男性は見当たらない。ログハウス風の住家、入口に燃料室、台所、奥は大部屋一間、ストーブ、サモワール、机、棚の上十字架、マリヤの絵、家具らしいものは見当たらない。少年がいたが栄養不良のようで青白い顔をしてい

る。

独ソ戦の耐乏生活か、我が国と同じような辛苦、泥のような生活を乗り切ってきたように思える。ナポレオンにモスクワが包囲されたが、寒さと食糧不足に耐え抜いてナポレオンの軍隊を撃退した。今また同じような苦しみを耐え抜いて独ソ戦を勝ち抜いた。

泥のような生活に耐える力をスラブ民族は持っているように思える。貧困に耐える、また耐えられる底力を持っている民族が収容所近くに。

川が流れている。オカ川の水が溢れ出してきた。飛行機で爆弾を落とす音がする。氷を砕いているようだ。

十二月七日

昨日、川へ爆弾を落としたので川の水が引いた。

程近いタンポフ、大きな街の近郊にあるラーダ収容所へ移住することになった(タンポフはモスクワ南東四〇〇キロ)。出発準備をして午後二時頃林の中のラーダ収容所へ着いた。収容所内の兵舎は屋根だけ地上に出た防寒用が目的の地下兵舎。収容所の回りは二

メートル位の土手、その上に鉄条網が張られている。監視塔もあり、かなり広いようだ。スターリンの大きな絵がすぐ目に入る。衛門を入ると、アコーデオンを主に吹奏楽で「大東亜行進曲」「見よ東海の空明けて旭日高く輝けば……」が流れてくる。我々の入所を歓迎している。全く予期しない驚きだった。忘れられないことだ。ハンガリーの捕虜の人たちだ。オーストリア・ハンガリーの時代にヒットラードイツと共にソ連と戦い、日本と友好国の時期があったことが思い出された。

収容所の中は花壇が多く見受けられたが、冬期なので花はない。

ドイツの捕虜が六、七千人位、日本人が五千人位になった。ハンガリー、オーストリア、ポーランド、イタリア、バルト三国等多くの国の人が収容されていると聞いた。

兵舎の内部は採光が少なく暗い。

十二月八日

入浴、衣類の熱消毒、体毛整理。入浴は月一回位、

入浴はポール一杯のお湯で体を洗う。石ケンは一〇羊かん位、サウナ室（鉄板、石を焼き、水をかけ水蒸気で汗を出す）、衣類は全部針金に通し、床が鉄板で、床下から火を燃やし熱処理をする。散髪や腋毛を剃る、一杯の湯で拭い、シャツ、サル股を洗う、寒いので震える。

体を洗うのは延吉以来四十日目位、宮本武蔵を思い出す。

食事は車中と同じ一日二回、カーシャで最低の状態。

十二月九日

作業が始まる。朝八時衛門前に集合、整列して近くの森で伐採作業。雪道のため、轆まわで運搬することになった。

衛門を通る時に人員を数えるのに将校もいる。門衛が中で数えられない。三百人位の人数を数えるのに二時間以上もかかっている。何回も何回も数えている（毎日のこと）。寒いのに立たされている。ソ連人の頭の悪いのに驚く。この国の一%にも満たない人間が、

強権でソ連の国を統治しているように思える。

収容所はドイツの捕虜が多い。数日だけの感じでは、ドイツ人（ゲルマン民族）はロシア人（スラブ人）を一目下の人間と思っているように思う。

ドイツ人の鼻っ柱の強いのに驚いた。ロシア位は何だ、スターリン位は何だ、ヒットラーは偉大で精神は生きている、数年のうちにロシアを圧倒する人だと意気軒昂。我々が建国以来初めて敗けてグシャツとしているのと気持ちの差を感じる。

長い歴史の年月の中に勝ち負けを乗り切ってきた陸続きの民族と、島国で勝ち負けを味あわなかった民族との間に違いがあるかもしれない。

東京の参謀本部にいた参謀の種村大佐や細川中佐数人の参謀が、阿南陸相や陸軍省の敗戦時情報伝達を、また天皇陛下の真意を関東軍に知らせるため来た旨を兵舎の二階の皆に話していた。同室の連中はよく耳を傾けて聞いていたが、空しきを感じていたことを覚えていた。瀬島龍三中佐の話もあったようだった。

近くの川の土手で作業中、ロシアの老人が来て君た

ちはヤボンスキーかと尋ねて来た。辺りを見て、日ロ戦争の時日本に捕虜になって善通寺にいたことがある、日本人に親切にしてもらった、明治天皇は思いやりのある人だった、それに比べてスターリンはニハラシヨ（悪い）だと言っていたのが嬉しかった。明治の日本人は昭和の日本人より人間的に優れていたことを痛感させられた。

森林伐採、薪運搬が続く。一日二食の給食と一食が黒パンになった。酸っぱい、フスマが多い、でも何でも食べねばならん。絶対的な量が足りない、国際赤字に提訴できないのか。提訴してもためか。

昭和二十一年

一月一日

正月はニシンの塩蔵と黒パンの代わりに白パンが出た。白パンの方が味がよい。一月一回位は白パンが出された。故郷の正月のこと、親兄弟のこと、東京の会社のことを偲んだ。

コルホーズの雑用に使役に出て、成人男子の姿が見えない、心外な話を聞いた。

ここはジャガイモ畑だ。収穫時には殆ど国へ納めることになる。正直に納めると冬場になって農民の配給が足りないので、困ることになる。それで穴を掘って埋め、国へ供出ししないことにしている。冬場は農民は足りない食料は掘り出して使用する。水分は凍って繊維が多くなる。それを焼くか煮て食べるのだと聞いた。

タンポフ近郊の部落の話では、部落には一人共産党員がいる。部落民は薬は持っていないが党員だけが持っている。貴金屬を持っている党員と軍人の社会だと言っていた。日本でも昭和十六年頃から軍人でなければ人に非ずと言われた。

阿城重砲時代の知人石井少尉に出会う。話しかけても返事がない。何だか避けているような感じだ。ベトン（あだ名）に間違いない、次に会った時も同じだった。残念。

タンポフの街へ出て、煉瓦工場やアルコール工場やオカ川の土手の工事を手伝う。

材木の集荷場がある。日本では見られないが、女の

人が男の人と殴り合いの喧嘩をしているのを見た。

部落では、十軒位の単位で漬物を共同で大樽で漬けていた。酸っぱい。

休日になると、若者が夜通し中腰で足を伸ばすロシアダンスを踊っていた。

タンポフのアルコール工場へ使役に出た時、女子工員が多く、休憩中立ちひざで座っているがパンツを付けていない。作業服以外の派手な服装をした女性を見かけない。暑い日には川に泳ぐ女たちを見かけるが、我々は、栄養不良のため性的なものには余り感じない。独ソ戦での物不足で農村地帯の女たちは質素になっているようだ。

コルホーズヘジャガイモ掘りに出る。大き目のものを生で食べる。リングオか梨の味がする、空腹なので二、三個食べる。夕方大変な下痢をする。これに繰り返して繰り返す。しかし体が保てないのでやめる。

以前、食料が悪いので関東軍参謀のA大佐（金沢の人）、身長一八〇センチ以上ある骨格の大きい人だったが、主導となって作業拒否ストライキをして食糧不

足を申し立てた。収容所側は衛門へ機関銃を据えて空砲をバリバリ射ち出した。近くの住民は、俺たちはストライキはできないがヤボンスキーはやれやれと言っていた。

その日は仕事は中止。数日後、所長がビンハネをしていたとして交替になったと聞いた。その後、少しはよくなったようだが。

五月二十日

またデマが流れる。日本へ帰るかどうか分からんが、このラーゲリから出るようだ。ソ連ではこの頃、べらぼうに暑い日が続く。三十年ぶりとか。コルホーズの妻は青枯れになってきた。

軍医の健康診断は女医だけしか見当たらない。尻を摘んで肉があればハラシヨラボータのようだった。

五月三十日

タンボフリラーダ間の道路作業は連日続く。道路の砂ホコリに閉口する。

現場で一個五ルーブルでアンパン位の白パンを売っている、白パンは食べたいが一月十ルーブルの手当

で、それも五月からだから手元に金が少ない。一個だけ買った。やっぱり白パンはうまい。バザールらしい所へ行った。珍しい物もあるが手が出ない。ソ連人でも買う者は多くないようだった。

六月三十日

道路作業は終わったらしい。東京ダモイか、移動のデマが流れる。本当かもしれない。このラーゲルから出ることが決定的のようだ。

①中尉 ②中佐、少佐、大尉 ③少尉 ④大佐、准尉、下士官、兵との会報があった。

七月十七日

第一梯団 二千人位 ①②

七月十八日

第二梯団 二千人位 ③④

この時連隊長から将校行李ていりの二個のうち一個もらう。連隊長は山中上等兵と延吉以来同行されていた。

三時起床、思えばこのラーゲルも最後になる。森にも永久に來ない。思い出に残ることがたくさんあったが、懐かしさは全然ない。

七月二十六日

早朝、ラーダの駅を貨車は北へ向かって発車した。来た時の進路とちよつと感じが違うように思う。四日後、正午頃停車下車を命ぜられる。東京ダモイの夢が消えた。

広野で材木の多い駅で、下車してから八〇キロ行軍することとで、行李は駅の倉庫へ預け、手回り品を持って駅前原つばで野宿した。

七月三十日

二時起床、タタール自治共和国のエラブカ九七收容所（レーニンの卒業したカザン大学のあるカザン市の北東二〇〇キロ位、ボルガ川の支流カマ川がある）に向かって出発、石畳ではないが、石を敷いたような道路が続く。ログハウス風の民家が多い。緯度が高いので（モスコイより少し北で、五七度位か）夜が長い。二〇キロ位歩いて露営する。

七月三十一日

早朝の出発だが栄養不足のため速く歩けない。落伍者も出る。二〇キロか三〇キロ歩いて露営。

八月一日

幾つもの民家を通ったが若者は見かけない。畑は広くジャガイモも多いが、荒地も多い。二〇キロか二五キロ歩いて露営。

八月二日

早朝出発、民家を抜けて教会らしい建物が見える。目的地エラブカ九七收容所に着く。キリスト教教会を收容所に改装したもの（レーニンが宗教は阿片であるとして弾圧した）。前のラーダでも教会が農家の倉庫になっていた。

收容所に入ると、個名点呼、身体検査、頭髮、ワキ毛、陰毛等を剃る、ボール一杯のお湯で体を洗って夜十二時頃寝る。

前の收容所ラーダより北上の建物でガッチリした二段收容だが、南京虫が多いのに閉口する。駆除の方法がない。

八月中旬

連日道路作業と森林伐採が主な仕事の日々が続く。ある時、野原の作業中聞いたことがある鳥の戦争を見

た。右の方から一群の千羽位、左の方からも千羽位が飛来、空中七、八〇メートル位で入り乱れて争っている状態を展開した。二十羽位が落ちて来て十分位で双方引き揚げた。鳥は日本の鳥より小さい。

ソ連の捕虜生活も一年が過ぎた。スターリン閣下への嘆願書を何回も書いていと責任者の話を聞く。無念だ。

このラーゲルへ移ってから『日本新聞』発行の連中の横暴さを耳にする。ソビエトの後押しと思われる日本人捕虜による日本の反動（皇室、政府、財界等）に対する攻撃の新聞『日本新聞』なるものがハバロフスクで発行されて各ラーゲルへ配付されている。ソ連への思想転向を勧誘するのが目的のようだ。勉強会もあるが参加したことなし。権力におもねる卑しさが情けない。

エラブカに来てから自動車や農業機械やその他機械の多くがアメリカ産で、ソ連人は何でもアメリカと言っている。アメリカの援助の大きいのは驚く。

八月中に日本へのハガキ通信が認められた。無事に

いることだけ知らせた。

ある日、縫工作業に近くの倉庫へ十五人位で入った。独ソ戦で得たゲルマンのシャツの整理、たくさん積まれている。汚れている縫い目にはシラミの死骸がビッシリ貼りついている。見た時はゾーッとした。洗濯する間もない長い戦争が続いたことが想像された。指がブラシでこすり取る、二日交替だった。独ソ戦のどこの戦場から集めたものか分からない。ドイツの捕虜の多いのも激しかった戦争が思いやられる。

九月上旬

九月初めにソ連の戦勝記念日とかで休みに入り、二年目である。いつ日本へ帰られるのか全く今日まで感じられない。

九月中旬

五〇キロ北のコクシャンへ鉄道作業に出る。一昼夜行軍、ゲルマンが七十人位いる。鉄道建設作業、この数日間の作業で、ドイツ人グループと近くで作業ができて能力の比較を見られたのが新たな感じだった。作業上のノルマでは成果を上げることが多かった。

物事の考え方、発想も劣ることがない。日本民族は世界に冠たる優秀民族だと思った。(戦後の復興がドイツより上で、世界の驚きであった。)

十月中旬

ボルガ川上流の伐採作業従事中、エラブカ宿舎へ「帰還命令」が来た。つかの間の秋が足早に去ろうとしていた時だった。露営を重ねてようやくエラブカのラーゲルへ戻った。またソ連人に騙されると話し合いの様子を見ていたが、いつもの様子と違う。名簿の提出、アルファベット順の編成換えが行われている。

はからずも連隊長の高畑洋平大佐と会う。連隊長とは当ラーゲルでは初めてである。元氣のようにお見受けした。「今度はどうやら帰られそうです。」「うん、今度は間違いない。二村や古池たちのように作業に従事している者が優先されるらしい。俺はまだあとの梯队になるらしい。」と、この会合が最期の別れになると思いかかった。四十二年秋、ハバロフスクの病院で病没されて日本の土を踏まれなかった。

ノモンハン事変の停戦時、小松原中將(兵団長)の

副官であったことが帰国が遅れたことに関係したのでは……。

御子息高畑尚志さん(現在は在京のビル管理会社塚本総業監査役で、母と横浜在住)、敗戦時は陸士上級年次五九期、陸士出身のため大変な苦難の道を歩まれた。平成五(一九九三)年東京駅ステーションホテルでお会いし、以後、賀状の交換をしている。

エラブカは緯度が高いので冬期は夜が短く、北の空には極光オーロラが鮮明ではないが明るくなって見える。いつ日本に帰られるのかなあと、何度もノスタルジアを感じた。

十月十四日

名簿の提出も済み、防寒外套、下着の取り替え、帰還の準備が終わりエラブカのラーゲルを出た。私物を持って三日間の行軍となり、帰還の希望が感じられた。ソ連人のウソに何百回となく騙されてきているので、また変更されるのかも不安が消えない。

十月十七日

駅に着き、二段収容の貨車にぎゅうぎゅうの状態

(百五十人位)に詰められ、東へ向かって発車した。往路の時より速いように思う。ウラル山脈を越え何日も過ぎてバイカル湖が見えて来た。日本への帰還は確実と思うが、ソ連人のことだ、万一との心配が消えない。

船に乗るまで安心できない。輸送中、二日入浴があった。帰国途中、囚人列車に出会わなかった。

出発してから二十日位して乗船地ナホトカ駅に着いた。

十一月十日だったと思う、二十日位の汽車の旅が終わった(昭和の初め頃はウラジオからモスコイまで十日と言っていた)。初めて見るナホトカ港はまばらな民家のある砂浜で、港湾施設らしいものが見当たらない。コンクリートの岸壁があるだけ。日本軍の八垂型天幕が幾つも建っている。

ソ連の御用新聞、捕虜に対する日本新聞の連中が来て、君たちはソ連に対して、またスターリンに対する感謝のプラカードも持っていない、他の梯団は持って来ているのに。お前たちは反動分子だ、『赤旗の歌』

や『インターナショナル』の歌も歌わない、他のラーゲルへ行ってもらいかも 싶れないと声高く言っていた。

彼らの中には心から共産主義になった者がいるかもしれないが、共産主義のようになったふりをして特別扱いや少しでも有利な待遇を期待している者も多いと思えた。

私たちは、ここで約一週間も毎日毎日共産主義と『赤旗の歌』や『インターナショナル』の歌の練習や清掃に使われ、この寒空に無駄な心配をさせられた。日本新聞の連中の馬鹿げた行為には腹が立つ。

十一月十八日

食事後、アルファベット順の名簿に従って人員点呼が始まった。いよいよ帰国である、この人員点呼の場所を通ると各自の持物の検査である。

この検査は税関のようで、後生大事に持っていたルーブル紙幣を全部取り上げられた。この金は、ラーゲルに入って一年半位してから作業した賃金をもらったもの、日本へ帰る時に日本円と交換するというのが

だった。それを帰る時に没収するとは、ソ連に騙されてしまった。

検査も終わり岸壁に連れて行かれた。日本の日の丸の旗が揚げてある。日本の日の丸を久しぶりに見る。胸が熱くなるのを覚える。もう百パーセント日本へ帰れることを感ずる。ソ連のバカヤロー、スターリンのバカヤローと叫びたい。ソ連政府の不信、独裁者スターリンの横暴は終生忘れることはできない。

体重は延吉では七三キロだったが、ナホトカでは四七キロになっていた。

悲しい出来事

福井県 赤坂 忠

農家の長男として生まれ、小学校を終わるのを待つて、春は田畑に冬は藁仕事の手伝いをさせられた。青年時代は戦争が始まっていたので物資が不足していた。欲しがりません勝つまでは。会社に就職したがそ

こには青年学校があり、陸軍少尉、教官がいて一日おきに軍事訓練が行われた。会社の仕事、そして家に帰れば食糧増産に励んでいた。その頃戦争も拡大し、昭和十九（一九四四）年の徴兵検査は一年繰り上げられた。私は甲種合格となり日本国民として名譽であります。友達で早い人は八月に入隊した。私は十月二十日に敦賀の三十六部隊に入隊せよと通知が来た。そして入隊の日、朝早く村のお宮さんに行った。そこには村長さんはじめ、青年団、婦人会、小学生、区民の方々が集まっておられ、武運長久祈願をされ、村長さんの挨拶の中で、お国のため頑張って下さい、留守中は私たちがお守りしますから安心して出征して下さい、とあった。それから歓呼の声に送られ、中部三十六部隊へ向かった。

入隊すると衣服が支給された。そして軍隊の規律等も話された。横におられた古年兵さんが、君たちは満州へ行くのだと言って、何かと親切に教えてくれた。そして二十六日の朝、出発の命令が出た。各中隊は舎外に整列した。一中隊が先頭で駅に向かう途中に三島